

集団極性化状況においてリスク態度が同調プロセスに及ぼす影響 ——自己制御理論の個人特性を基底として——

祖父江 直樹

本研究は集団極性化現象(Moscovici & Zavalloni, 1969)を個人特性から捉えることを大きな目的として実施された。集団極性化とは、討議による集団意思決定が個人意思決定に比べ、極端にリスク、あるいはコーシャス(堅実)なものとなる現象である。集団極性化は社会的影響過程における情報的影響と社会的比較に起因し、意見を他者に合わせる「同調行動」の繰り返しといえる。そこで、本研究では、集団意思決定場面を、「個人のリスク態度の表明」と「他者意見への同調」の2フェーズの繰り返しとし、「リスク態度による、同調の生起しやすさの違い」を個人特性から説明することを目指した。

本研究が考慮する個人特性に関する理論は制御焦点理論と自己意識理論である。制御焦点理論は、人間は望ましいものへの接近に敏感である促進焦点と望ましくないものからの回避に敏感である予防焦点を有しており、両焦点の置き方は特性的に異なるが、促進的であればあるほど、あるいは予防的であればあるほど、強く行動を規定するというものである。これより、リスク態度における本研究の前提的な仮説として、「促進焦点が優位である場合はリスク、予防焦点が優位である場合はコーシャスになる」が導かれ、実験前のCDQ(choice dilemma questionnaire)による調査によって支持された($U = 109.00, p < .10$)。また、自己意識は同調を規定する特性要因として機能し、自己の外面への着目である公的自己意識が、内面への着目である私的自己意識よりも優位である場合は同調しやすく、反対に私的自己意識が優位である場合は同調しづらいことが従来示されている。

前提仮説が支持されたことと自己意識と同調の関連についての先行研究より、制御焦点によって規定されるリスク態度と自己意識の交互作用についての仮説「私的自己意識が優位な場合、リスク態度がリスクあるいはコーシャスに極端なほど同調しづらく、中庸なほど同調しやすい。公的自己意識が優位な場合、リスク態度の程度によって同調の差はない」が立てられた。仮説検証のため、先のCDQに関するコンピュータ上での集団意思決定を模したクラッチフィールド型同調実験が用いられ、本研究における同調のパラメータである「初期意見への固着回数」において仮説を支持する結果が示された(Figure1)。

以上より、集団意思決定において balans とも考えられる中庸な意見の保持者が、特性的な自己意識によっては極端な意見に流されやすく、集団自体を大きく左右する、集団極性化現象の引き金となる群派となり得ることが示唆された。また、リスク研究・同調研究の両者において状況要因に関する研究が主流である中、それらがともに自己制御に関する個人特性の影響を受け、関連を持つことが示されたことは新規的意義であった。今後、制御焦点や自己意識を操作する研究により妥当性を高め、また、より実際場面に即した研究によって応用性を高めることが求められる。(社会心理学)

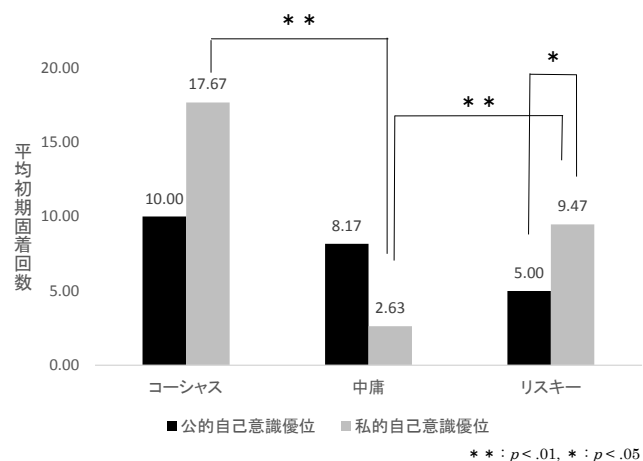


Figure1 初期固着回数におけるリスク態度×優位自己意識の比較